中央大学論集　第43号　2022年２月

ドアが呼び起こす記憶

――高齢者施設のドアを個性化するプロジェクト True Doors についてのノート――

横　山　佐　紀

はじめに

コレクションとアイデンティティの関わりは，ミュージアム研究や文化人類学やなど物質文化を扱う領域における重要な論点のひとつである．ジェイムズ・クリフォードは，自己や集団のまわりに何かしらを集めること，すなわち，ひとつの物質「世界」を集積し，主体の領分を他者から区別することは普遍的な営為であり，集積されたモノ＝コレクションは，価値の序列や排除，規則などの下にある自己のテリトリーといったものを体現していると述べている[1)]．クリフォードのこの議論は，ミュージアムのコレクションに象徴される器物／芸術（artifact/art），西洋／非西洋の区分を再検討することを射程に収めるものでミュージアム研究に大きな示唆を与え続けてきたが，モノの集積がアイデンティティの表出と深く関わっているという指摘は，私的な所有物についても適用可能であろう．

実際，私たちは，手に入れたり失ったりしながら日々モノとの関係を築いており，モノは私たちの周りに構築される「拡大された自己」である．モノは所有者の不在を通じて，その人の存在を強く感じさせる場合すらある．「だれかのモノ」に過ぎないものが所有者の没後には唯一無二の「遺品」となり，親しい人にとっては「形見」となってもとの所有者を想起させる記憶の源泉となる．私たちはモノと共に記憶を重ね，他者とつながるが，このことは，モノをできるだけ少なくして暮らすいわゆるミニマリストや，所有物を厳しく制限する修道会（たとえばフランチェスコ会）のように宗教的な信条をもつ者でもない限り，私たちがモノを排除して暮らすことは難しいということでもある．

モノ資料を扱い，公的記憶に深く関わるミュージアムにおいて，モノと記憶は重要なテーマであり，近年では，高齢化社会におけるニーズを反映して，所蔵品＝モノを活用した「回想法」を取り入れたプログラムを行う館や，高齢者を対象とするギャラリー・トークを行う館もある．さらに，海外の高齢者施設においては，入居者の私的なモノを居住空間に組み込むことで，その人の過去の経験や記憶を振り返ったり共有したりするプロジェクトが行われており，現在，モノと記憶の関係に注目するさまざまな試みが，高齢者に関わる

1）ジェイムズ・クリフォード（太田好信ほか訳）『文化の窮状』，人文書院，277-278頁．

場で進行しているとみてよいだろう．モノとアイデンティティ，記憶の関係は，自身の人生を振り返ったり，モノの整理を考えたりする段階にある高齢者の場合はより大きな意味をもつためである．

これらの中でも，アムステルダムの高齢者施設において実践されている「True Doors」は，本人のアイデンティティばかりでなく，他者との関係をも維持する鍵として居室の「ドア」に注目してする試みであり，所蔵品を軸に行われるミュージアムの回想法とはまた異なる視点をもつきわめてユニークなプロジェクトである．プロジェクトであると同時に団体名でもあるTrue Doorsは2014年に設立され，現在４名のチームで運営されている．同年には，アルツハイマーを患う人たちの生活をより良いものにする活動として評価され，MSDケア賞（オランダ）を受賞している．現在，アメリカ，オーストラリア，カナダなどでもTrue Doorsを取り入れる施設があり，すぐれた高齢者ケアとしてそのネットワークを広げつつある．所蔵品（身近なモノ）を活用する回想法と比較しても，このプロジェクトの鍵が「ドア」を素材とすることにあることは明らかであろう．本稿では，試論として，True Doorsが「ドア」に注目する意味を検討し，高齢者ケアとしてだけではなく，人とモノと記憶の関係を問い直すプロジェクトとしてTrue Doorsを位置づけてみたい．

以下，はじめに，個人の所有物とアイデンティティとの関係を膨大な聞き取りから明らかにしたチクセントミハイ＆ロックバーグ＝ハルトンの調査を確認する．そのうえで，ミュージアムにおける所蔵品を活用した高齢者を対象とする回想法のプログラムの現状を概観し，最後にTrue Doorsの事例分析を行う．

１．モノを所有することと個人の記憶

(1) チクセントミハイ＆ロックバーグ＝ハルトンによるインタビュー調査

モノが私たちのアイデンティティの一部を成すことについては，所有に関わる問題として論じられてきた．たとえば，ジャン＝ポール・サルトルは，「自分が何者であるかは所有物に目を向ければ知ることができる」とし，所有することは，行動すること，自分であることと並ぶ，人間の経験の三つの基本的な形であると述べている．ウィリアム・ジェームズも，費用を出すこと，あるいは，欲しがることは本能であり，生涯にわたって続くものであると考える．さらに，エーリッヒ・フロムは，モノを手に入れることは，人々が周りの世界とつながるための方法のひとつであり，モノを手に入れることがその人の性格の核となる特徴を形作るという[2)]．

一方，個人の所有物とアイデンティティとの関係について，思い出や記憶に目配りしながらインタビュー調査を行い，きわめて実証的に論じたのがチクセントミハイ＆ロックバーグ＝ハルトンによる『モノの意味』である[3)]．

チクセントミハイ＆ロックバーグ＝ハルトンによれば，歴史の区分が「旧石器時代」や「新石器時代」，「青銅器時代」，「産業革命時代」や「原子力時代」というように，その時代に時代に生産されるモノの変化に応じて名づけられているのは，人間とモノが歴史的に深く関わってきた証左であ

2） ランディ・O・フロスト，ゲイル・スティケティー（春日井晶子訳）『ホーダー―捨てられない・片づけられない病』日経ナショナルジオグラフィック社，2012年，65-67頁．

3） ミハイ・チクセントミハイ，ユージン・ロックバーグ＝ハルトン（市川孝一訳）『モノの意味―大切な物の心理学』誠信書房，2009年．

るという．個人の水準においても，一人ひとりの過去の思い出や現在の体験はその人をとりまく環境を形作っているさまざまなモノと分かちがたく結びついており，チクセントミハイ＆ロックバーグ＝ハルトンは，人が使用し，所有し，身の回りに置いているモノは単なる道具ではなく，その人の一部であり，「自己」という秩序を与えてくれるものであるとみる[4)]．

この問題意識に基づき，1977年，チクセントミハイ＆ロックバーグ＝ハルトンは，シカゴの都市部に住む82家族，回答者315名を対象に，「あなたの家にある大切なものは何か」をテーマとするインタビュー調査を行った．具体的な質問項目は以下である．①家にある物で回答者にとって特別な物は何か，②なぜそれらの物が特別なのか，③もしもその物がなかったら，それはどういう意味を持つか，④その物をいつ手に入れたか，⑤その物をどのようにして手に入れたか，⑥その物はどの部屋に置いてあるのか[5)]．

調査対象者たちが挙げた「特別なもの（家の中でもっとも大切にしているモノ）」は全部で1693個であり，これらをカテゴリー化して整理したところ，上位10種を占めたのは以下である（※は筆者による概要）．

1．家具 36%：イスやソファ
※「夫と私が買った初めての品としてのイス」など，思い出や経験との結びつきが深く，本人や家族の記号である事例が見られる．

2．視覚芸術品 26%：著名な作家による原画，複製画など．
※「孫娘が描いた絵を大切にしている」という事例のように，家族によって描かれた絵も含まれる．

3．写真 23%
※世代間の差が顕著で，世代が上がるほど特別なものとして挙げる人の割合が高い．

4．本 22%：語学書や聖書など

5．ステレオ 22%
※最年少世代における割合がもっとも高い．音楽は感情を調整する役割をもち，逃避や欲求不満の発散の手段のひとつでもある．

6．楽器 22%：ピアノ，ギター，トロンボーンなど

7．テレビ 21%

8．彫刻 19%：著名な芸術家によるオリジナル作品から，大量生産の複製品まで
※彫刻の美的性質はほとんど言及されず，「母親が買ってくれた彫刻」など，家族関係をあらわすことが多い．

9．植物 15%：室内植物

10．食器 15%：皿，カップなど
※女性や年長者が重視する傾向が強い．「結婚の贈り物として20世紀はじめにイギリスからもってきたカップと皿」など，人や場所とのつ

4） 同書，ii-v，18-19頁．

5） 同書，373-374頁，「付録A　調査の手続きとインタビュー上の注意」より．「物」の表記は原文ママ．対象者の内訳は以下のとおり．職業および学歴の観点から，上層中流階級および下層中流階級が半々，若年世代79人，中年世代150人，高齢世代86人，回答者の44パーセントが男性．全体の67パーセントが白人，30パーセントが黒人，３％がラテン系・アジア系・その他．対象者の選択の第一基準は，インタビュー可能な三世代が揃っている家族であるかどうかであり，三世代のうち一世代でも車で１時間以上離れた場所に住んでいたり，子どもが10才未満だったりする家族は除外されている．調査は1977年４月に始まり，1978年２月に終了，各回答者は自宅で約２時間のインタビューを受けた．以上，同書68-69頁，372-375頁．なお，この条件設定から，チクセントミハイらが緊密な家族関係を結んでいる人たちを対象にしていることが推測され，大切なモノと家族のよき思い出が結びついた調査結果となりやすいことは付言しておきたい．

ながりや，共通の祖先や子孫を表わす．

世代別にみた「大切にしているモノ」の上位3位は以下のとおりである[6]．

子世代（青年期）：1．ステレオ：45.2%，
2．テレビ：37.7%，
3．家具：32.92%

親世代（中年期）：1．家具：38.1%，
2．視覚芸術品：36.7%，
3．彫刻：26.7%

祖父母世代（高齢期）：1．写真：37.2%，
2．家具：33.7%，
3．本：25.6%

また，大切なモノが本人にとってどのような意味をもつかを世代間で比較すると，世代が上がるにつれて「思い出」の割合が増加していく（子世代：48.1%，親世代：82%，祖父母世代：83.7%）[7]．

調査結果全体を通じて「家具」の存在感がきわだっていること，しかも世代を問わずに大きな意味をもっていることに留意したい．チクセントミハイ＆ロックバーグ＝ハルトンは，三世代の中でも高齢者世代と家具の関係に注目し，家具は高齢者自身やその人の記憶の一部であり経験のしるしであって，物理的機能のみにおいてこれをみるべきではない．なじみのない新しい環境に高齢者が置かれたとき，家具は個人としての連続性を感じさせたり，意味をもたせたりする手段でありえることを軽視してはならず，高齢者からこういった「具体的なモノ」を奪うことは，彼らの自己を破壊することにつながると指摘する[8]．つまり，モノは長年にわたって積み重ねてきた経験や記憶と深く結びついており，そのようなモノからその人を引き離すことは―たとえば，住み慣れた自宅を離れて，機能性的で安全だがどの部屋にも同じ家具が備えられている高齢者施設に入居したりすることは―，その人を大きく傷つけ，損なってしまう可能性があるということである．

(2) モノとの関係を失うこと：『わたしのウチには，なんにもない.』

チクセントミハイ＆ロックバーグ＝ハルトンによるこの指摘は，所有の対極にある「モノを失うこと」の意味を私たちに考えさせるものでもある．

ゆるりまいのエッイマンガ『わたしのウチには，なんにもない.』は，モノがあふれる家で，祖母，母と暮らした作者が，長じてミニマリストとなるまでを描いた作品である[9]．全編を通じて語られるのは，「いかにして捨て，持たざる暮らしを維持するか」であるが，第4巻では，作者をミニマ

6） 同書，120頁．子世代（若者の世代）が大切にしているモノの筆頭が「ステレオ」であることなど，これらのカテゴリーやランキングには当時の社会状況が強く反映されていよう．現代であれば若者世代の大切なモノ上位3位には，必ずスマートホンが入るものと思われる．筆者は担当授業内で「大切なモノ」をテーマとするワークショップを継続して行っているが，スマートホンは必ず上位にランクインしている．

7） 同書，125頁．しばしば思い出や記憶と関連づけられる写真は（チクセントミハイらは，写真と思い出の結びつきをポジティブなものとしてとらえている），同時に「喪失」とも結びついており不在をより強く喚起させるものでもある．たとえば家族写真が，喪失や痛みを表象すると同時に，それを埋め合わせるものであることについては，マリアンヌ・ハーシュによるポストメモリーの議論を参照のこと．Marianne Hirsch, *Family Frames: Photography Narrative and Postmemory*, Cambridge and London: Harvard University Press, 1997.

8） 同書，126-127頁．

9） ゆるりまい『わたしのウチには，なんにもない.』第1巻，第2巻：2013年，第3巻：2014年，第4巻：2015年，エンターブレイン．

リストへと駆り立てた最大の要因である，片づけられない祖母と母とモノの関係が描かれている．

もともと多くのモノを抱えていた祖母は認知症発症後，モノをさらにため込むようになる．見かねた娘と孫娘が整理や片づけを提案しようものなら，「嫌！　触らないで！　あんた達からしたらゴミに見えるかもしれないけど 私にとっては大事なモノなの！」[10]，「絶っっ対ダメよ！　これは全部っ大事なものなんだからっっっ！」[11] と怒りをあらわにし，ふれることすら許さない．祖母がモノを処分しない理由は「ご先祖さまからいただいたものだから」である．祖母の父親が購入した高級な和箪笥（仙台箪笥）もそのひとつだが，孫娘にとっては自分の部屋に勝手に置かれ手入れもされずにただ古びていく場所取りの厄介モノであり，その処遇をめぐって祖母，母，娘の間で言い争いが起こる頭痛の種である．ところが，東日本大震災による自宅の被災と建て替えを機に箪笥を修理に出したところ，見違えるように美しくなって戻り，この箪笥の価値と意味を三人が再認識する[12]．祖母の没後，娘（母）と孫娘（作者）はモノの整理（遺品整理）を通じて，長年にわたる祖母との困難な関係にも整理をつけていく．

「家具」（箪笥）が，思い出や先祖とのつながりを象徴するモノとして，結果的に三世代にわたってキーとなっていることは，チクセントミハイらの調査結果と符合するのだが，同時に，ここには人とモノと記憶をめぐるもうひとつの関係性が含まれているように思われる．それは，自身の同一性や記憶や体験の枠組みが揺らぐとき所有者とモノとの関係もまた揺らぎ，大切なものを「選び出すこと」が難しくなるということである．

10） 同書，第４巻，67-68頁．
11） 同書，第４巻，79頁．
12） 同書，第３巻，第７話．

先に引用した「全部大事なものなんだから！」という祖母の言葉は象徴的である．なぜならこれは，家にあるものの中から大切なモノを選択し，エピソードを語り，自身にとって大切である理由を説明するといったチクセントミハイらの調査対象者の経験とは正反対の身振りであるからだ.「全部大事」とは，「なに一つ捨てることはできない」という以上に，「所有するモノの重要性や意味の強弱を，私は私自身に秩序づけることができない」という告白でもあり，モノと所有者の関係が破綻しかかっていることを示していると考えられよう[13]．

もちろん，程度の差こそあれ，人は不要なモノ，ほとんど使わないモノを何かしら持っているものである．しかし，本人が生活に不便をきたし，近隣住民にも影響を与えるほど極端にモノをため込む場合はその行為（症状）を「ホーディングhoarding」，行為者を「ホーダー hoarder」といい，しばしば専門的な診断を要する．ホーディングを引き起こす原因はさまざまだが，親しい人を亡くしたことを契機に発現するケースが指摘されている[14]．親しい人を亡くすことは自身の一部を失うに等しい経験であり，そのようなアイデンティティの危機的状況は，拡大した自己ともいえる身の回りのモノとの関係にも反映される．放埒

13） いわゆる汚屋敷に住む母親との関係を描いた高嶋あがさのマンガ『母は汚屋敷住人』（実業之日本社，2015年）にも，「全部大事」という発言が登場する．作者（娘）と弟はモノの整理がまったくできない母のもとで育ち家を出る．ある事情で10年ぶりに実家に戻った娘があまりの汚屋敷ぶりを見かねてモノの処分や整理に手をつけるのだが，そのたびに母親との激しい諍いが起こる．廊下と玄関のゴミを処分しようとする娘に対し，母親はこう言う．「全部使う物だから捨てる物なんて無い!!」（36頁），「全部使うのよ！」（106頁）．高嶋の場合も，母娘の難しい関係があふれかえるモノと関わっていることが推測される．

に集められたり，秩序なく集積されたりするモノは，揺らぎの渦中にある所有者自身であり，その人が抱える危機の表現でもある．ゆるりまいの祖母の場合は，おしゃれだったのに服装に頓着しなくなったり，しっかり者だったのに記憶があいまいになったりと，認知症に伴うその人らしさ（アイデンティティ）の変化がモノにも映し出されたものと思われる．

2．高齢者を対象とするミュージアムのモノのプログラム

(1) 昭和日常博物館の回想法

その人らしさとモノ，記憶が密接に関わるのであれば，「モノ」から出発して，その人自身にアプローチすることも可能であろう．モノ（＝所蔵品）を活用してミュージアムにおいて行われている「(地域) 回想法」は，そのようなモノと記憶のプログラムである．

「回想法」とは，1963年にアメリカの精神科医ロバート・N・バトラーによって提唱された，高齢者をおもな対象とする精神療法である．高齢者は人生を振り返り，さまざまな過去の記憶や思い出を語るが，そのような語りは「繰り言」や「何度も聞かされた話」などと否定的に受け取られることが多い．しかしバトラーは，これを死が近づいてくることにより自然に起こる心理的過程であり，過去の未解決の課題をとらえ直す機会でもありえると考え，個人やグループ，家族が思い出を語る療法，すなわち回想法を提案した．現在，回想法はアメリカ，イギリス，カナダ，日本など各地で実践されており，日本では，一部の病院や介護施設でうつ病や認知症を患う人への非薬物治療法のひとつとして取り入れられている[15]．

治療法としての回想法では，モノが何らかの役割を果たすわけではない．これに対し，回想法の基本をふまえつつ，モノを出発点として高齢者の語りを共有し，認知症予防や介護予防を目ざすのが，ミュージアムで行われている回想法である．昭和日常博物館（正式名称：北名古屋市歴史民俗資料館）はその先駆としてよく知られる．

平成２年（1990年）に師勝町歴史民俗資料館として開館した同館は，当初より，昭和時代の生活資料の収集展示に力を注いでいた．平成５年（1993年）より昭和時代の資料に光を当て，その後，昭和30年代（1955年～1964年）を焦点とする展示を始めたところ，来館者が，展示されているモノ＝資料にまつわる自身の経験や思い出を語る様子が頻繁に見られるようになった．これを受けて，国立長寿医療センターの医師や作業療法士，保健士，学芸員が協力し，平成14年（2002年），博物館と福祉と医療が連携する認知症ケアとしての「思い出ふれあい（回想法）事業」が実現された[16]．昭和日常博物館における回想法は，収蔵品を新たな分野で活用したい博物館側の意向

14） フロスト，スティケティー，前掲書，65-68頁．一方，セルフ・ネグレクトとしてゴミ屋敷をとらえる立場もある．ホーディングの因果関係やこれへの対応については，精神医療や福祉などの領域において議論が重ねられているところである．岸恵美子『ルポ ゴミ屋敷に棲む人々―孤立死を呼ぶ「セルフ・ネグレクト」の実態』幻冬舎，2012年．

15） 回想法の対象者や方法，ライフレビューとの相違，実践上の注意点など，詳しくは次を参照．野村豊子『回想法とライフレビュー―その理論と技法』中央法規，1998年．

16） 昭和日常博物館における回想法開始の経緯については，以下を参照．市橋芳則「師勝町『思い出ふれあい（回想法）事業』の展開―回想法を用いた博物館の高齢者支援プログラム」日本博物館協会『博物館研究』39（５），2004年，16-21頁．なお，同館は，回想法および世代間交流の拠点としての活動が評価され，2020年に「第一回 日本博物館協会賞」を受賞している．

と，介護予防，認知症予防や地域づくりを目的とする「保健福祉の地域ケア」がうまくかみ合って進められた事例であり，日本で初めて回想法を地域の中に取り入れた「地域回想法」として位置づけられている[17]．

実際，昭和日常博物館はまさに「昭和の空間」であり，ちゃぶ台やブラウン管のテレビ，魔法瓶などが設えられた畳敷きの部屋があったり，かつて一般的だった鍋やトースター，目覚まし時計，ブリキの看板など，見る者が思わず「なつかしい」と口走るような展示品にあふれている．筆者が同館を訪問しバックヤードで調査をしていたところ，展示室からにぎやかな声が聞こえてきて，思わず様子を見に行くと，高齢者の団体が楽しそうにおしゃべりをしながら展示を見学しているところであったということがある．

高齢者とミュージアムをつなぐプログラムとしては，ミュージアムのスタッフが道具や所蔵品を持って出かけていくいわゆる出張プログラム（アウトリーチ・プログラム）が知られよう．しかし，昭和日常博物館が重視しているのは「博物館に出かけてもらうこと」である．それは，「お出かけ」という楽しみばかりでなく，昭和時代の空間全体を体験することで個人の経験が喚起され，公共財としての所蔵品が私的な記憶と関係を結ぶことが「お出かけ回想法」の要点だからであろう．筆者がたまたま目撃したように，同じモノをだれかと一緒に見ること，それについて語り，だれかに聞かれること，また，同時代を生きた他者の語りを受け取ることは，お互いの経験や記憶が共有され，認められる経験でもある．その語りには事実誤認や不確かな記憶が含まれるかもしれないが，そうであったとしても，ひとりでモノに向き合うのではなく，見られ，聞かれることによって他者とつながり，共感されることがミュージアムにおける回想法の核であろう[18]．

(2) 海外のミュージアムにおける事例

回想法に関連して，海外のミュージアムで行われている所蔵品や作品を通じて個人の記憶を喚起するプログラムにも目配りをしておきたい．

オックスフォード博物館では，高齢者たちが語る思い出，すなわち「回想」を地域の歴史や文化のオーラル・ヒストリーととらえてミュージアムの資料として残し，さらに，これを展示にも反映させる試みが2010年より行われている．「昔なつかしい思い出話 Memory Lane」と呼ばれるプログラムがそれで，話し合うテーマは「戦時下に過ごした子ども時代」，「オックスフォードの通りの名前」，「オックスフォードの産業」，「1950年代」などさまざまである．このプログラムでは，ファシリテーターによる進行のもと，参加者はテーマについて自由に話し合い，その会話は録音される．録音は，参加者の同意を得たうえで，参加者本人に一部（CD）が，もう一部は後の世代が聞くことができるようオックスフォードシャー州歴史センターに収められる[19]．また，この録音は，企画展や常設展の展示の一部に使用されたり，展示パネルのテキストに引用されたりしており，たとえば，スポーツをテーマとした回の記録は，ロ

17） 北名古屋市福祉課「回想法」のページ． https://www.city.kitanagoya.lg.jp/fukushi/3000067.php

18） 他者に見られること，聞かれることによって世界に接続されることについては，アレントの議論を参照のこと．ハンナ・アレント（志水速雄訳）『人間の条件』，筑摩書房，1994年，78-79，86-87頁．

19） 筆者は2020年２月21日にオックスフォードシャー歴史センターにてこれらの録音記録９点を調査し，プログラムの内容や参加者の発言などを確認している．

ンドン・オリンピックが開催された2012年の企画展『位置について，ヨーイ，ドン！』の一部に活かされた．参加者は，地域の歴史を伝えることやそれが展示に反映されることを誇りに感じ，このプログラムに参加するだけでなく，自身が関係した展覧会に友人を連れてきて，回想をさまざまな人と共有し，さらには来館者層を広げることにも貢献している．

また，オーストラリアのナショナル・ギャラリー（キャンベラ）では，高齢者施設のグループが定期的に美術館を訪れ，美術館スタッフと共に作品数点を見て話し合うギャラリー・トークが行われている．モノにまつわる思い出を語る回想法とは異なるものの，作品というモノを通じて対話し，高齢者の記憶を呼び覚ますという意味では，そのバリエーションであると考えてもよいかもしれない．プログラム担当者によると，ギャラリー・トークで取り上げる作品を選択するにあたり，性的なテーマを描いた作品や抽象作品を避けるのは望ましくない，なぜなら，高齢者も若者であったころには性的にアクティブであったはずであるし，抽象的な作品は理解できないだろうというのは思い込みであるという[20]．高齢者を，弱々しく，記憶があいまいで，具体的なものしか理解できない人たちだと考えるのは誤りであるばかりか彼らの経験と人生への敬意に欠けるとの指摘は，次に取り上げるTrue Doorsの基本姿勢にも共通する．

20） 2015年４月10日，ナショナル・ギャラリー，エデュケーター，エイドリアン・ボーグ（Adriane Boag）氏へのインタビューより．

３．True Doorsのドアと記憶

（1）高齢者施設におけるデザインの問題

モノから記憶を喚起させるという点では回想法と基本的な方向性を共有するが，公共財を私的な記憶につなげるのではなく，私的な記憶と深く結びついたモノを公共の場に掲げ他者と共有するプロジェクトが「True Doors」である[21]．

高齢者施設の居室のドアは，力をかけずに開けられる引き戸であったり，安全につかまることのできる取手が付いていたりと，便利ではあるがどれもこれも同じ見かけで，「安全性と機能性が優先された家具が備えられた環境」そのものである．ところがTrue Doorsは，居室のドアに本物の住宅のドア（＝true doors）の画像ステッカーを貼って個性を与え，画一的なドアが延々と続く環境をまったく違うものにしてしまう．

ドアを変える手順はこうである．True Doorsはドアの画像を500点以上ストックしており，これらはオンライン上でも公開されている．その中から気に入ったドアを，入居者本人やその人をよく知る人に選んでもらう．次に，選ばれたドアの画像を実物大に引き伸ばしたステッカー状のシートを居室のドアに貼り付ける．これで作業は終了である．完成したドアは街中で見かける住宅の玄関そのもので，廊下には，デザインも色合いも素材感もさまざまなドアが立ち並ぶことになる．このプロジェクトが目ざすのは，施設で暮らす高齢

21） True Doorsのウェブサイトのトップページには，次のように記されている．「味気ない廊下を家庭的なご近所に変えましょう―自分のドアがわかり，見つけられるようにしましょう．プライバシーと安心安全を高めましょう．思い出とお互いの関わり合いを刺激しましょう．高齢者がくつろげるようにし，美しい職場でスタッフを元気づけましょう」．https://www.truedoors.com/

者が自分自身で何かを選択し管理することを尊重し，彼らがくつろいで生活できることである.「自分で自分のドアを選択すること」を通じて，その人の個性や人生が一枚のドアに表現されることになるのである.

このプロジェクトの背景には，1980年代以降の施設(特に，認知症をもつ高齢者が入居する施設)における空間や建築デザインに関する議論と，「home」の概念に関わる議論が関わっていることをまずは確認しておきたい[22]．1980年代以来，ケア・ホームの視覚デザインや建築が入居者の生活やふるまい，ときには認知症の症状に大きく影響することが注目されてきたが[23]，1990年代に入ると，認知症のある人たちが「くつろげること（feel at home家庭にいるように感じられること)」が重視される．具体的には，「いかにも施設的な施設」から，それぞれの部屋に個性があり，家庭で使われているような家具が備えられ，自然の要素を取り入れるといった「家庭的な雰囲気」へのシフトである．2000年代には視覚デザインや建築の重要性がさらに認識され，たとえば，入居者が行き先を間違わないためのすぐれたサイネージ・デザインの必要性などが指摘されている.

一連の議論において，「家庭／家族（home)」は重要でありながら，扱いに注意を要するキーワードである．True Doorsもウェブサイトや報告などでhomeにまつわる表現をしばしば用いているが，しかし，このhome，とりわけ高齢者にとってのhomeが人，モノ，記憶の観点からいったい何を意味しうるのかは，実のところきわめて複雑であり，かつ問題含みであることが指摘されている.

homeの概念を批判的に検討するフェイ＆オーウェンにしたがえば，家庭は多くの人にとっては何かよきものを意味するかもしれないが，いつも幸福に満たされているわけではない．虐待，離婚，良好ではない家族関係，あるいは家／家庭そのものがない（あると感じられない）ケースもあるはずで，「幸せな家庭」は，いうなれば神話である．家庭がはらみうる暴力や不和などを考慮すれば，理想化された「home」観の取り扱いには注意すべきであるのに，デザイナーはまさにステレオタイプ化された「良き家庭」を施設に表現しようとする．フェイ＆オーウェンは，ステレオタイプ化されたhome観に基づいた施設のデザインが生み出す不具合や考慮すべき点として，以下を指摘している[24].

・高齢者は共有している経験が多いので，お互いに話し合うだろうとの思い込みから，人々が集まる共有スペースが重視されることがある．しかし，実際には高齢者どうしが「家族のように」コミュニケーションすることはなく，待合室のように，別々に座っていることが多い．共有スペースは，「家族が集まるリビングルーム」のようには機能しない.

・共有スペースの内装は家庭的に見えるが，内装を決めるのは施設の運営者やデザイナーである．だが，高齢者自身が装飾や空間構成の決定に関わることは，「homeを築く（居を構える)」経験と

22） Rahzeb Choudhury and Marijn Voorhaar, True Doors, *How personalizing interiors improves the lives of people with dementia*, September 2018.

23） Jiska Cohen-Mansfield and Perla Werner, "The Effects of an Enhanced Environment on Nursing Home Residents Who Pace," *The Gerontologist*, Vol.38, No.2, 1998, pp.199-208,.

24） Roger Fay and Ceridwen Owen, "'Home' in the aged care institution: authentic or ersatz," *Progedia: Social and Behaviroal Sciences*, 35（2012）, pp.33-34.

して非常に重要である．

・住み慣れた場所から離れることで，homeはどうしても変質してしまう．しかし，長年にわたって手元に置かれてきたモノは，私たちを過去，現在，未来につなげるよりどころとなる．住環境が変わるとき，高齢者にとって「大切なモノ」の重要性は増す．

フェイ＆オーウェンは，homeは多元的であり複雑であること，高齢者施設おいてhomeを実現しようとするならば，美化され平凡で表面的なhome観ではなく，これまで重視されてこなかった三つの視点，すなわち，プライバシーの尊重，自律性の尊重，入居者への敬意に配慮することが必要であるという[25]．True Doorsはまさに上記の三点に配慮したプロジェクトである．

(2) True Doorsの効果に関する調査レポート

筆者は2020年２月，True Doorsのクリエイティブ・ディレクター，マリーケ・ヴァン・ディーペン（Marike van Diepen）氏と共にアムステルダム市郊外の高齢者施設，De Dieを調査のため訪れ，True Doorsが設置されているフロアを見学し，マネージャーと面談した．この施設は2016年にTrue Doorsを導入し，当初41枚だったドアは，現在では115枚に達している．フロアのTrue Doorsは街で見かけるドアそのもので，ガラスがはめ込まれ鉄のフレームで装飾されたドアや，内側に白いレースのカーテンがかかったドアや，中には何かの影の映り込みまでが再現されているドアもあり，画像が非常に高精細なこととも相まって，ステッカーを貼りつけただけのドアとは思えない仕上がりであった（図１，図２）．廊下を個性豊かな空間とするためには，この完成度の高さは不可欠である．

図１

図２

マネージャーとヴァン・ディーペン氏への聞き取りにより，この施設でTrue Doorsを取り入れているのは特定のフロアのみであり，前の入居者が選んだドアを次の人がそのまま使っているケースもあること，入居者自身がドアを選ぶことが難しい場合は，その人をよく知る関係者がその人が好きな色などを手がかりにドアを選ぶことがあること，プロジェクトが始まった当初はその人の家のドアの写真を撮ってドアにしていたが，現在では500点のコレクションから選んでもらっている

25） オーウェンらが，若かりし頃の記憶のみに焦点を当てることは，高齢者と未来の世代とのつながりを失わせることになりかねないとし，環境（建築，デザイン，備え付けの家具など）が過去志向であることの問題にも言及している．

こと，ただし，施設のスタッフが事前に絞り込んだものから選んでもらい，家族に話を聞くこともあること，以上を確認している．

しかしながら，筆者によるこの聞き取りは限定的であり，プロジェクト全体を評価するには不充分である．そこで，より包括的な調査として，オランダ精神保健・アディクション研究所（Netherlands Intsitute of Mental Healthe and Addiction, Trimbos-instituute）とTrue Doorsによる共同調査を参照し，True Doorsの効果や成果を確認したい．

2015年３月，オランダ中部のヴィーネンダールにある施設において，入居者18名（認知症をもつ９名と，精神疾患のある９名）のうち15名の参加を得て，True Doorsが実施された．各々が選んだドアが設置された３週間後，入居者の家族や介護関係者，施設のボランティアらを対象にインタビュー調査が行われた．質問は，入居者の方向感覚，雰囲気，記憶，およびケア・ホームの生活環境などに関するもので，以下が回答の概要である[26]．

①入居者が居心地よく感じられているか

ドアが取り付けられることで，入居者は，施設の部屋にいるのではなく自分自身の家にいるように感じている．ドアが設置されて以来，何人かが自分の部屋を「小さなわが家」と説明するようになった．攻撃的で落ち着きがなく，常に家に帰りたがっていた人が，ドアをかつて住んでいた家のドアにしたところ，部屋を「家」と認めるようになり，たいへん穏やかに部屋に向かうようになった．

②方向感覚

以前はすべてのドアが同じに見えたので居室を認識するのが難しく，自分の部屋がどこなのかを介護スタッフによく尋ねる入居者もいた．True Doorsを取り付けてからは行き先を見つけやすくなり，自分の部屋，ほかの人の部屋，トイレなどを区別しやすくなった．「ここが私の部屋ね」と言って自分の部屋に迷うことなく歩いていく人もいる．

③入居者の雰囲気

介護関係者や家族は，True Doorsが入居者に良い影響を及ぼしていると感じている．ドアを楽しんでいる人たちは，にこにこしながら部屋に戻ることが多くなった．介護者や精神的問題を抱える人の家族は，本人がドアを選び，その選択に満足し，ドアを誇らしく思い喜んでいることから，入居者自身がドアを選ぶことが非常に重要であると考えている．ドアは魅力的で，明るく家庭的な雰囲気を作り出していると家族は感じている．

④記憶

自分のTrue Doorsを見て，そのドアがついた家に住んでいたことを思い出すことができた人がいる．ドアは過去の記憶を呼び起こしている．入居者と思い出を話すために意図的にドアを話題に取り上げる介護スタッフもおり，その会話の中で，このドアはもとは違う色だったけれども塗り直されたのだということが話されたりした．ドアによって入居者や家族に感情的な反応が起こることがあり，家族にもまた家にまつわる思い出があるので，家族自身が過去についてたくさん話し始めたケースもある．こういったことは，入居者と家族が一緒に思い出を語る助けとなっている．

26） Marijn Voorhaar, MSc, Drs. Iris van Asch and Dr. Bernadette Willemse, *The story behind the door: An explosive study on the added value of true doors for residents of care homes*, originally published September 2015, English translation January 2019, Trimbo instituut. 本調査の実施と成果の刊行は，2014年にTrue Doorsが受賞したMSDケア賞の賞金によるものである．

⑤プライバシー

True Doorsが設置されたあと，ドアに鍵をつけてもらえないかと尋ねる入居者がいた．この施設の部屋はロック可能であったが，これを要望した人はドアを自分自身でロックしたいとのことだった．ドアを設置して以来，入居者たちは部屋を施設の一室ではなく自身の家だと考えるようになったためであろう．ある人は，以前はそうではなかったのだが，部屋を出るときにドアを閉めるようになった．別の人は，悲しくなってプライバシーが必要なときに部屋に行きたがるようになった．それはTrue Doorsのおかげで，部屋では自分自身でいられるので，必要なときは部屋に引っ込むことができるとわかったからである．

⑥場の雰囲気

介護関係者は，廊下が楽しい雰囲気となり，家らしくなったと感じている．廊下を歩くときはまるで通りを歩いているようで，廊下は病院のようには見えない．居室は個性的になり，入居者も介護関係者や家族もこれをたいへん積極的に受けとめている．もはや冷たくて魅力がないという雰囲気ではない．

⑦社会的交流

ふたりの入居者が連れ立ってドアを見ながら散歩して話すようになった．家族もまた入居している家族と一緒にドアを見ながら廊下を歩くことがある．入居者はドアを比べたり評価したりするのが好きで，家族もまた一緒に同じことをするのを楽しんでいる．

〔その他〕介護関係者への影響

介護関係者もまた行き先を見失うことがなくなり，ドアと入居者を結びつけることができるようになった．ドアがあることで，そこがだれかの個人的な住まいであると感じられるため，介護関係者は入室前にノックをするようになり，入居者のプライバシーがより尊重されるようになった．

以上から，この報告書は，ドアが積極的なインパクトを入居者に及ぼしていると結論づけ，具体的な事柄として，ドアによって，入居者が家にいるような気持ちになり，より快適に過ごすことができ，自身の部屋を「小さなわが家」と感じていること，プライバシーの感覚を強くさせること，そして会話し，散歩をするといった行動を促すことを挙げている．

(3) True Doorsがもたらす人とモノと記憶の関係：「ドア」であることの意味

True Doorsのプロジェクトにおいて，モノ（＝ドア）が記憶を喚起し，他者との交流を促すきっかけとなることは，ミュージアムで行われる回想法と共通するように思われる．実際，ドイツには，特定の時代のモノをコレクションした部屋を設けている高齢者施設があり，生活スペースとコレクション・ルームを接続するという方法もあるはずである[27]．そうであるにもかかわらず，True Doorsが「ドア」に特化してプロジェクト

27) ドレスデンにある高齢者施設には，旧東ドイツ時代の回想ルームが設けられている．ある年代の人たちにとっては，今はなき社会主義国家の時代がその人がもっともアクティブであった時代に重なり，短期記憶の保持が難しいアルツハイマーの人にとっては，この時代の記憶のほうが鮮烈に思い出されるという．その部屋には，1960年代のラジオ，旧東ドイツのパスポート，ドライヤー，当時よく知られていたアイスクリームの広告などが展示されている．ここでよく時間を過ごす入居者は以前よりもよく食べ，水を飲むようになり，自分でお手洗いに行けるようにもなったという．この施設では，ベルリンの壁が崩壊した1980年代の部屋を新たに作ることを計画中である Rick Noack, “A German nursing home tries a novel form of dementia therapy: Re-creating a vanished era for its patients,” *Washington Post*, December 26, 2017.

を進める理由は二つの側面から考えられよう．

ひとつは，ドアがもつ象徴的な意味である．改めて確認するならば，ミュージアムの回想法が，展示されている公共財（所蔵品）を私的な記憶に接続していくのに対し，True Doorsは「かつて住んでいた家の玄関のドア」というきわめて私的なモノを施設の廊下に掲げる／展示するプロジェクトである．いうまでもなく，家はさまざまな次元において良くも悪くも自己や親しい人（家族，親戚，友人など）に深く結びついていて，玄関の「ドア」はそのような家の象徴であり，文字通り記憶に通ずる扉である．ドアは，その人の核心にふれるもっとも私的なモノのひとつであるのだが，それにもかかわらず（あるいはその象徴性のあまりの重大さゆえに），ドアはチクセントミハイらのような調査が想定する「大切なモノ」の範囲を超えており，調査の対象からも回答からも漏れてしまっている．同時に，True Doors設置にあたり入居者に任されている選択が，ただ「ドア」のみということに留意しよう．対象がドアに限定されているため，当事者は「お皿も大事だが，孫が描いた絵も大事だ」というようにほかの可能性との間で迷う必要がない．ドアは，「大切なモノ」の聞き取り調査で言及されることはほとんどないが，象徴的にはきわめて重要でその人の記憶と深く結びついており，かつ認知症を患っていたりして「選ぶこと」が困難な人であっても比較的容易に自分の意志で選択できるため，きわめて有効な素材なのである．

もうひとつが，ドアの「位置」と「役割」である．その内側は個人の居室であり，ドアは私的空間であるといえるかもしれない．しかし同時に，ドアは廊下という公的空間の一部をなしており，私的空間と公的空間の境界線上に位置する両義的な存在である．私たちが施設のいずれかの場所を個性化しその人らしさを表現しようとするとき，対象としてまず思い浮かべるのは個人の居室，すなわちドアの内側ではないだろうか．たしかに居室は個人の意思にしたがって自由に個性化されうるが，しかし，同時にそこは許可を得て「訪問」されるべき場所であり，自由な立ち入りは認められず，基本的に閉じられた，他者に接続されにくい空間である．これに対しドアの外側は人が自由に行き来する公的空間であり，実際，入居者は廊下で長い時間を過ごしているという．廊下を往来するのは入居者ばかりでなく，さまざまな仕事を担当する介護スタッフ，家族，ボランティアも同様である．そのような，いうなれば施設内の「通り」に私的な記憶のしるしである「ドア」を掲げるのがTrue Doorsというプロジェクトなのである．ドアが見られることによって，ドアの中に住む人の存在やドアそのものがほかの入居者や家族，介護スタッフによって知られ，語られ，承認されることが可能となる．ドアを設置したあと入居者がカギをかけたがったり，ドアを閉めるようになったりとプライバシーを求めるようになるのは，他者のまなざしによって「私」が認識されるからであろう．私的空間たる居室の中をどれほど私のモノで満たしても，このような承認と他者との関係が得られることはない．

ドア自体は私的な記憶を象徴するが，しかし，それは完全なる私的空間にあるのでも公的空間にあるのでもない．二つの閾にあり，開け閉めさえすれば両者が通じ合ったり隔てられたりする，その両義的な一枚のドアを私的な記憶につなぐことで，ミュージアムの回想法とはまた異なる形で「他者に見られ，聞かれること」がTrue Doorsでは成立し，プライバシーや自律性が尊重され，敬意が払われるのである．

おわりに

本稿では，チクセントミハイらによる「大切なモノ」に関する調査をふまえながら，モノがその人らしさの一部であり，思い出や記憶と深く結びついていることを確認し，ミュージアムにおける回想法と，True Doorsのプロジェクトの相違と意義を検討してきた．True Doorsはたしかに高齢者ケアを目的とするプロジェクトであるが，同時にモノと人，アイデンティティ，記憶の問題に深く関わっており，私的空間と公的空間の境界にある「ドア」を通じて，その人が尊重され，かつ他者との関係が築かれるプロジェクトである．モノによって私的な記憶を喚起するだけではなく，他者の存在への目配りがあることにこそTrue Doorsの意義と独自性があるといえよう．

モノと人，記憶の関係を広くとらえるTrue Doorsは，回想法で活用される所蔵品とはまた異なる「ドア」に注目するがゆえに，これまでのミュージアム研究や実践事例には含まれなかった公的空間／私的空間に関する視点や，他者との関わりなどについての知見をもたらしている．これは，医療や福祉のみではカバーしきれない，“モノ”を媒介とするからこそ可能となるアプローチであるといえるかもしれない．記憶や記憶とモノとの関係は多義的で，決して一面からのみとらえることはできないが，その研究と実践には，物質文化研究，福祉，ミュージアム研究，さらにはアート・プロジェクトなど領域を横断して展開される可能性が広がっているように思われる．

＊本研究は中央大学特定課題研究費の助成を受けたものである（課題名：モノと記憶―地域ミュージアムにおける回想法の可能性，2018年～2020年）．